

幻のナス復活へ

伝統野菜「寺島ナス」を授業で栽培

東京都墨田区立第一寺島小学校

伝統野菜「寺島ナス」復活への足がかりに――。東京都墨田区立第一寺島小学校（高橋英三校長）では、1879年の創立時に地域で生産していた寺島ナスを、授業の一貫で栽培しようと7日、6年生約60人が苗を定植した。三鷹市中原で露地野菜70アを経営する星野直治さん(65)が栽培を指導する。苗は180本用意し、近隣の小中学校や公園、神社でも栽培し、地域全体で「幻のナス」作りに取り組む。

「より丈夫に育つように接ぎ木

しました。学校には時間を作って見に来るので、しっかりと管理してください」と、あいさつする星野さん。

なるべく農薬を使わずに

この日は、60リットのポットに園芸用の土を50リットル入れて、支柱を2本立てる。苗を2本植え、支柱に固定する。農薬をできるだけ使わないように、アブラムシなどに効果のある防虫テープ「ムシコンテール」を支柱に結ぶという作業を行

った。

「根っこがいっぱいついてる」
「土の中にミミズがいる」
「虫にやられずにナスが育ってほしい」
――。子どもたちは2人1組となり、慣れない手つきで苗を定植していた。

地元住民が生育状況を観察できるように、ナスは道路から見える場所に置く。ポスターを掲示してPRする。

寺島ナスの一品種とされる「蔓細千成」は、現在栽培されていない。種は、独立行政法人農業生物資源研究所のジーンバンクから取り寄せた。

星野さん自身も栽培経験がないため、苗づくりは手探りだった。通常のナスと同じように、1月に播種し、3月に接ぎ木を行った。生育状況は異なるが、問題なく育苗できたという。

星野さんは「普通のナスは葉が3枚出てつぼみが出るが、寺島ナスは葉が2枚でつぼみが出る。『千成』というだけあり、たくさん収穫できるのではないかと説明する。

手本を見せながら、苗の定植を説明する星野さん(中央)



2人1組で苗定植 栽培は農家が指導

今後は、必要に応じて小学校に出向き、子どもたちに栽培指導する。適確にアドバイザーするため、自らの圃場にも40本植えて、生育状況を確認していく。

東京都野菜生産団体連絡協議会の会長で、NOSAI東京の理事を務める星野さん。「日ごろ食べられている野菜が、どのような行程で作られているか知ってほしい。自分で栽培すれば、店頭に並ぶ野菜を作る大変さがわかってもらえる」と話す。

宅地化進み廃れた栽培

小学校がある墨田区東向島はかつて「寺島村」と呼ばれ、江戸時代には盛んにナスを栽培していた。しかし、関東大震災以降は宅地化が進み、寺島ナスの栽培は廃れてしまった。

東京都農林水産振興財団の食育アドバイザーで、江戸東京・伝統野菜研究会の大竹道茂代表は「小学校で栽培を始めて復活に結びついた『亀戸大根』のように、寺島でもナスを栽培してほしいと小学校などに呼びかけた」と振り返る。

「子どもたちには、生きものを育てる大切さとともに、昔、ナスを栽培していた時代のことを学んでほしい」と、同小学校の和田浩二副校長。「寺島ナスの種を取り、来年以降も引き続き、栽培していきたい」としている。



星野さんの指導を受けながら作業を進める女の子たち



蔓細千成は葉が小さく、花が多いのが特徴